

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32699

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580035

研究課題名(和文) 18 - 19世紀花鳥画と美人画の境界的画題に関する研究

研究課題名(英文) The study concerned with a boundary-like subject about a painting of flowers and birds and a painting of beauties in the 19th century from the 18th century

研究代表者

今橋 理子 (Imahashi, Riko)

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：70266352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：私は長年、江戸時代花鳥画と博物学の関係について研究してきた。とくに近年では、花鳥画に関連する18世紀以降に生まれた新しい「画題」に関して研究を行っているが、その途上において次の点に気づいた。すなわち花鳥画とは、根本的に「ことば」と切り離すことができない絵画ジャンルであるということである。花鳥画のなかに暗喩として隠されたことばは、現代語の意味や現代文化の事象と直結しない場合が多い。本研究では、花鳥画と美人画の両方の絵画ジャンルに跨っている「美人と白鸚鵡」という伝統的テーマが、19世紀以降の芸術家たちに如何に理解され、また彼らがそれを応用して如何に「新しい画題」創出へと繋げたかについて考察した。

研究成果の概要(英文)：I have been engaged in research into the relationship between Edo-period kachou-ga (bird-and-flower paintings) and natural history for many years. In recent years, my research has particularly focused on new related "subjects" that began to emerge in the eighteenth century. Over the course of such research, I noticed the following point. As a genre, kachou-ga is inextricably linked to "language." Often, metaphors within kachou-ga are not directly linked to any current linguistic meaning or to any present-day cultural event. My latest study examines how the traditional bijin to shiro-oumu (beautiful woman and parrot) subject, which straddles the kachou-ga and bijin-ga genres, was understood by post-eighteenth century artists and how their response to it led to the creation of "new styles."

研究分野：日本美術史・比較日本文化論

キーワード：日本・東洋美術史 江戸時代絵画 近代美術 画題 図像と言説 花鳥画 美人画

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は著書『秋田蘭画の近代 小田野直武「不忍池図」を読む』(2009年、東京大学出版会)において、同作品が単なる花鳥画ではなく、実は中国的美人画の見立て作品であることを立証した。そうした視点で再検討したところ、同様の読み直しを必要とする作品が相当数あることがわかってきた。従来、日本・東洋美術史においては、美人画を含む「人物画」と「花鳥画」は厳然と分けられており、ましてや「見立て」の思考が両者の間で成立していたという見解は示されたことはない。こうした視点に立ち、18 - 19世紀美人画と花鳥画を同時に再考する方法論の確立が、その境界的「画題」の特定方法と共に重要な点である。

2. 研究の目的

研究代表者は近年、とくに「画題の生成と消長」という問題意識のもと再検討を行い、その研究途上で以下のような新たな問題意識を得た。すなわち現代では「花鳥画」という絵画ジャンルに対しての議論は、モチーフの個別的な同定やその組み合わせによる構図法など、表層的な分析にとどまっている場合が多い。しかし東洋の花鳥画は伝統的に、吉祥性を導く視覚言語として表されてきており、根本的に「ことば」と切り離すことができない絵画ジャンルである。従って現代の近世期花鳥画への誤解は、何らかに明治という近代における花鳥画理解の問題も孕んでいるのではないかと、ということである。

上記1.でも述べたように、研究代表者は著書『秋田蘭画の近代』(東京大学出版会、2009)において、小田野直武筆「不忍池図」(重要文化財、秋田県立近代美術館蔵)が単なる花鳥画作品ではなく、実は唐詩の伝統にもとづく「閨怨」を主題として美人画の見立て作品であることを立証した。そうした視点で同様に広く18 - 19世紀花鳥画の再検討を行ったところ、例えば、伊藤若冲による一連の「白鸚鵡図」は、実は文学世界で伝統的に多用されてきた楊貴妃言説にもとづく「見立て美人画」であることが判明する。そして、これと同様の見直しを必要とする作品群が、相当数あることが予備調査において判明した。

しかし、従来、日本および東洋美術史の範疇では、美人画と花鳥画は厳然と分けられており、ましてや「見立て」の思考が両者で成立していたという見解は示されたことがない。越境的に両絵画ジャンルを捉え、同時に考察しようとする方法論の確立は、従来の美術史学の在り方そのものを再考する意味をもつのである。そうした視点をもとに、18 - 19世紀美人画・花鳥画を同時に考察するために、その境界的「画題」を特定する方法の確立を目指すことは、それは同時に、明治以降現代に至るまでの美人画や花鳥画の「主題再考」という点をも促すことになるのである。

3. 研究の方法

本研究は今橋理子を研究代表者として3か年で進めた。基本的には25 - 27年度にわたる関西を中心とする作品調査(円山四条派など)によるデータの収集、またそれにもとづくパソコン上でのデータベース化、さらに明治～昭和初期に刊行された美術雑誌の記事の再検証をおこなった。とくに後者の作業を通じては、江戸時代までにおいてはごく一般に認知されていたと考えられる絵画における「言語的理解」が、明治時代以降に如何にして(あるいは何故に)忘却ないし消失していったかを検証した。このような調査と検証を踏まえて、花鳥画と美人画の「境界的主题」に関する試論の執筆を目指した。

4. 研究成果

平成25年度は具体的な作品調査を主に行うことをはじめ、『古画総覧』(国書刊行会)などに収録された花鳥画や美人画類を活用して、パソコン上でデータベース化することを目指した。またこの作業と並行する形で、明治～昭和初期に刊行された美術雑誌記事を再検証することを行い、花鳥画および美人画に関する当時の「言説」の洗い直しを行った。そうした作業を踏まえて単著論文「1900年の楊貴妃 矢崎千代治《教鷓》と正岡子規、鍋木清方」(『アステイオン』第81号)を発表した。

平成26年は前年に引き続き、関西方面での作品調査を行うとともに、やはり明治～昭和初期の美術雑誌および文藝雑誌に所載された美人画に関する「言説」について資料収集と分析をおこなった。その結果、「鸚鵡と美女」という主題に関する新たな発見を、美術のみならず多くの近代文学作品にも見出すことができた。その発見の一部を単著論文として「白鸚鵡と美少女(上) 鍋木清方《鸚鵡》と《嫁ぐ人》」(『学習院女子大学紀要』第17号)に発表した。

平成27年度は最終年度にあたるが、上記2つの論文をさらに発展させるべく、作品調査によって得られた資料データの分析と成果論文の執筆に集中した。年度内に単著論文「白鸚鵡と美少女(下)」を発表する予定であったが、執筆途上で新たな事実発見があったため、それを精緻化する必要から論文発表自体は来年度に見送る決定をした(『学習院女子大学紀要』19号に掲載予定)。なお、本課題については単著『美人画と花鳥画の境界』(仮題)としても発表する方向で執筆を進めており、そちらは平成29年春に岩波書店より刊行を予定している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

今橋理子「白鸚鵡と美少女(下)」(単著)、『学習院女子大学紀要』第19号、2017年3月刊行予定、掲載頁未定。

今橋理子「聖と俗の犬 江戸時代「犬画」を読み解くために」、『渋谷区立松濤美術館「いぬ・犬・イヌ」展図録、2015年4月、6-17頁、査読無。

今橋理子「白鸚鵡と美少女(上) 錦木清方《鸚鵡》と《嫁ぐ人》」(単著)、『学習院女子大学紀要』第17号、2015年3月、1-19頁、査読無。

今橋理子「1900年の楊貴妃 矢崎千代治《教鸚》と正岡子規、錦木清方」(単著)、『公益財団法人サントリー文化財団「アステイオン」』第81号、2014年11月、4-13頁、査読無。

今橋理子「「波」に兎か 「かたち」の記憶の彼方へ」、『東京大学出版会「UP」』、2014年2月、1-17頁、査読無。

[学会発表](計9件)

今橋理子「人と桜の心性史 人はなぜ桜を植えるのか?」、『学習院生涯学習センター特別講演会、2016年3月26日、学習院女子大学(東京都新宿区)(招待講演)

今橋理子「絶学の人 解体新書の画家・小田野直武と秋田蘭画」、『東洋文庫「解体新書展」記念講演会、2016年3月5日、東洋文庫(東京都文京区)(招待講演)

今橋理子「江戸時代博物学の創造力 近衛家瀧「花木真写」の芸術世界」、『公益財団法人東京都公園協会、2015年9月12日、東京都公園協会(東京都千代田区)(招待講演)

今橋理子「笑う犬、黙る犬 江戸時代「犬画」の図像学」、『渋谷区立松濤美術館「いぬ・犬・イヌ展」記念講演会、2015年4月10日、渋谷区立松濤美術館(東京都渋谷区)(招待講演)

今橋理子「いま再びの 不忍池図 秋田蘭画を理解するための3つの鍵」、『第29回国民文化祭・あきた2014「江戸に花開いた秋田の文化」記念講演会、2014年10月5日、秋田県仙北市角館交流センター(秋田県仙北市)(招待講演)

今橋理子「美術史学と女性研究者 日本における1990年代以降の動向と現状」(口頭発表)、『学習院女子大学主催・国際シンポジウム「グローバル化時代における女子高等教育の役割 日本とサウジアラビアの事例から」』、2014年10月5日、学習院女子大学(東京都新宿区)

今橋理子「人はなぜ桜を植えるのか 震災復興と再生を願って」、『公益財団法人白鹿記念酒造博物館「暮らしの中にみる桜展」記念講演会、2014年5月17日、白鹿記念酒造博物館(兵庫県西宮市)(招待講演)

今橋理子「福猫たちの図像学 江戸の動物画の思考法」、『渋谷区立松濤美術館「ねこ・猫・ネコ展」記念講演会、2014年4月19日、渋谷区立松濤美術館(東京都渋谷区)(招待講演)

今橋理子「円山応挙と幽霊画伝説」、『品川区主催区民大学教養講座、2013年7月19日、品川区中小企業センター(東京都品川区)(招待講演)

[図書](計3件)

今橋理子「赤い鸚哥の意味するもの」、『鈴木一義ほか共著「江戸の科学大図鑑」所収、河出書房新社、2016年、96-97頁。

今橋理子著、Ruth S. McCreery 翻訳『The Akita Ranga School and The Cultural Context in Edo Japan』、『International House of Japan, Inc.』、2016年、434頁。

今橋理子『兎とかたちの日本文化』、『東京大学出版会、2013年、202頁。

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今橋 理子 (IMAHASHI, Riko)

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授
研究者番号: 70266352

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし